

[11] フィリピの信徒への手紙 1 章 27 節－30 節(2)

「キリストのための苦しみ」

《1》

「ひたすらキリストの福音にふさわしく生活を送りなさい、つまり、《生きなさい》」。このようにパウロはフィリピ教会の人々に、そして今の私たちに勧め、命じています。

これは、信仰に徹して、いつまでも、どこまでも、信仰をもって生きるように、との勧めです。

そうすれば、あなたがたのことで次のようなことを聞くことができるでしょう、と述べて、三つのことを挙げています。

一つの霊によってしっかりと立っていること。心を合わせて福音の信仰のために共に戦っていること。そして、どんなことがあっても反対者たちに脅されて、たじろぐことのないこと。この三つです。

これらのことは、堅く確かな信仰によって生きるとき、それに必然的に伴って生じることである、と言ってもよいでしょう。つまりただ主イエス・キリストの御霊である聖霊によって堅く立つこと、信仰の戦いを雄々しく行うこと、そして、常に勇気と希望をもってたじろぐことのないこと。これらは、信仰に生きることそのものです。

今朝はその続きの、29 節以下を見ていきます。

29 節「つまり、あなたがたには、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。」

まず、主イエス・キリストを信じる信仰ですが、それが、恵みとして与えられている。

信仰というのは、人間が努力した結果、はじめて獲得できるというようなものではないことは、信仰の基礎の基礎、初歩の初歩ですね。そして、初歩とか基礎というのは決して忘れてはならない重要な中にも重要な真理です。

少し微妙なことですので、そのことに、もう少し触れましょう。人間の努力の賜物ではないというのであれば、では、人間はそのために何もする必要がないし、行なっても無駄だ、ということになるのでしょうか？ 何の意味もないのか。

もちろん、そういうことではありません。救われたい、罪の赦しを得たい、ということであれば、そのための何らかの努力をしましょう。聖書を読む、祈る、いろいろと本を読んだり、人から話を聞いたり、というように……、そのことに励む。

人間として、そのように努めることのほうが自然です。そうあるべきだ、とも言えます。ただ寝ていれば、いつか我知らず、救われる、というのではないですからね。

人間の努力、働きは絶対必要でしょう。しかし、救いとか罪の赦し、永遠の命といったことは、そのような人間的な働きとは一切関係なく、上から、神さまから、一方的に与えられる、ということです。

そして言えることは、救いや赦しを心から願っていない人に、何のかかわりもなく、偶然のようにして、まさに棚ぼたのように、信仰が与えられることは恐らくないだろう、ということですね。

信仰は人間の力によることではなく、神さまの力である。これは確実な真理です。このことを、コリントの信徒への手紙一 12 章 3 節が、「聖霊によらなければ誰も、イエスは主である、とは言えないのです」と告げています。

また、信仰が神さまの恵みであることを、エフェソの信徒への手紙 2 章 8 節が端的に述べています。「事実あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことはみずからの力によるのではなく、神の賜物です」。

すべては恵みです。恵みにより、信仰によって救われました。信仰によって救われること、これは人間的な力によるのではなく、神さまからの一方的な、そして確実で強力な賜物によることです。

《2》

次に、そのような賜物として与えられるのは、ただ単に信仰だけではない。苦しむことも、賜物として与えられている、とあります。

これは驚くべき言葉、また不思議な言葉と言ってもよいかもしれません。

苦しみというものを、どうか与えてくださいと望む人は、ほとんどいないでしょう。

まさに、この苦しみを避け、苦しみから逃れるために、信仰とか宗教とかいうものがあるのだ、と考えるのが、世上一般のことかと思えます。

ところが、ここでは苦しみが、神さまからの賜物として与えられている、というのです。

キリスト教以外のほかの宗教のことはあまり詳しくありませんから、断定的なことは言えませんが、恐らく、苦しみが賜物として神さまから与えられているのだ、というように、苦しみを肯定的、前向きに捉えているのは、キリスト教以外にはないのではないのでしょうか。

もちろん言うまでもありませんが、自分が悪いことをして、それで苦しむというようなことは、ここで言われていることではありません。

それを端的に、ペトロの手紙一 2 章 20 節が述べています。「罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう」。——そして続きの後半部分から、21 節にかけてこうあります。

「しかし善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。あなたがたが召されたのは、このためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです」。

善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶことは、神さまの御心に適うことである。キリストも苦しみを受けられた、というのです。

善を行って苦しむ、というのは、何か善行をする、というような道德のことではなく、信仰をもって生きること、主イエス・キリストのために生きることだ、と言ってよいことです。

これと同じことが、フィリピの信徒への手紙においては、キリストのために苦しむ、と言われていています。

どんな苦しみでも同じというのではなく、主イエス・キリストのために受ける苦し

みこそが、ここでの問題なのだということです。

善を行って受ける苦しみというの、キリストのために受ける苦しみというの、どちらも同じことですね。

そして、これらの苦しみが、神さまからの賜物として与えられているものなのだ、というわけです。

パウロ個人の苦しみとしては、まさにフィリピ伝道での、初めの頃の出来事があります。使徒言行録 16 章ですが、パウロとシラスはフィリピにおいて牢獄につながれてしまった。

このとき、二人は真夜中にも賛美歌を歌っていたとありますが、突如大地震が起こり、牢の戸が皆、開いてしまった。看守は囚人たちが逃げてしまったものと思込み、自殺しようしますが、パウロがそれを押し留め、結果として、看守の家族全員が洗礼を受けるに到った、という出来事がそのとき起こっています。

そのほかにもパウロは実に多くの苦しみ、苦難を経験しています。そのリストともいべきことが、コリントの信徒への手紙二 11 章 23 節から 29 節までに、詳しく記されています。

長いので、全部読むことはしませんが、そこには例えば、鞭で打たれたこと、石を投げつけられたこと、難船したこと、川の難、盗賊の難、偽の兄弟たちからの難、また、しばしば眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食わずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありました、などとあります。

そして、今も牢獄という苦しみの中にあります。

ところで、ここでの苦しみというのは、キリストのための苦しみ、あるいは善を行ったことによる苦しみである、と先ほど述べました。

パウロの受けた苦しみは、みな福音を伝えるために受けた苦しみですから、キリストのために受けた苦しみそのものと言えるでしょう。

ただし、これをあまりにも厳格に捉え過ぎる必要はないのではないかと。なぜなら、信仰者はみな主イエス・キリストを信じています。それは生き方としては、直接、伝道するとか、証しをするということに全力を投入するということでは、必ずしも無いかもしれません。

しかし、いわばその人の生き方全体を通して、神さまを喜び、神さまのご栄光を現そうとしている生き方であるはずで。それは、そのまま、キリストのために生きている、ということであり、受ける苦しみは、キリストのための苦しみである、と言えるのです。

このように、信仰者には苦しみが与えられています。テサロニケの信徒への手紙一 3 章 3 節に、「私たちが苦難を受けるように定められていることは、あなたがた自身がよく知っています」とあるとおりです。

そうは言っても、なぜ苦しみがあるのか。ましてそれが、神さまからの賜物としてあるのか。この理由がわからなければ、私たちの心は落ち着きません。

この理由。——それは主イエス・キリストが苦しまれたこと。私たちの救いのため

に、十字架の上で苦しまれたこと。これを抜きにして、考えることはできないでしょう。

私たちは、苦しむならば、主イエス・キリストの苦しみに、単なる観念としてだけでなく、事実そのとおりに、主の苦しみにあずかることになります。苦しみにあける交わりがそこに成り立ちます。

そして、この苦しみはことごとく、救いに通じています。主イエス・キリストの十字架によって罪の赦しと永遠の命がもたらされ、信じる者には、それが確かな事実として、その人において実を結びます。

ですから、苦しむことは私たちの現実の力となり、希望となります。

みなさんにも多くの苦しみがあるでしょう。人知れず苦しんでいる、というようなこともあるかもしれません。私も苦しみを今、抱えています。

しかし、このような苦しみを通して、主イエス・キリスト以外に頼む御方は誰もいない。このことは、前々からわかっていることですが、それでも一層深く、確かに、それを知るようにもなりました。これは恵みではないでしょうか。

詩編 119 編 71 節「卑しめられたのは私のために良いことでした。私はあなたの掟を学ぶようになりました」。

この御言葉ですが、聖書協会共同訳（2018 年末出版）では、こうなっています。

「苦しみに遭ったのは、私には良いことでした。あなたの掟を学ぶためでした」。

苦しみに遭ったのはよいことであった。それは主の掟を学ぶため、つまり神さまの愛をいよいよ深く知るために他ならなかった、ということです。

また、ローマの信徒への手紙 5 章 2 節から 5 節をお読みします。

「このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。そればかりでなく、苦難をも誇りとします。私たちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望は私たちを欺くことはありません」。

苦難、苦しみは、希望を生む。この希望は、それを頼みとし、それを捉えているなら、決して欺かれることはありません。揺るぎなき、確かな希望です。

《3》

30 節では、「あなたがたは私の戦いをかつて見、今また、それについて聞いています」とあります。

苦しむと共にあって、主イエス・キリストのため、そして主の御栄光のために働いてきた自分の生涯を一言でまとめるようにして、《戦い》と述べています。

信仰の戦い。信仰に生きる戦い。それは、キリストのために苦しむことを、まさに恵みとして受け止めるための戦いである。恵みとして受け止めることができるようになるための戦いである、と言ってもよいでしょう。

人間的な思いでは、そのようなことはありえないことです。

しかし、主イエス・キリストの十字架の愛と恵みを想う時、そして、御霊の憐れみ深い導きと慰めを受けるとき、苦しみが恵みである。神さまの賜物として与えられて

いる。

このことを感謝をもって、覚えることになるでしょう。

パウロの戦いを、そしてまた、キリスト教会の二千年に及ぶ、聖徒たちの歴史に見ることのできる同じ戦いを、私たちも戦っているのです。

2021年11月7日 朝拝

恵み深い天の父なる神さま、尊い御名をあげます。

私たちは、信仰だけではなく、苦しみをも、賜物として与えられています。

それは、いよいよ深く十字架の主イエス・キリストの愛と恵みを覚え、これに生かされ、そして、ますますあなただけに抛り頼む者とされるようにとの、あなたからの賜物です。

この恵みを感謝いたします。どうか、主とその恵みに生かされている者として、苦しみをも大きな恵みとして、受け止め、喜ぶ者とさせてください。

御霊の慰めと導きが、常にありますように。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司